

神戸市立須磨翔風高校 2 年の西尾光暉君（17）＝同市須磨区飛松町 2＝が、現代詩の全国コンクールで最高の文部科学大臣賞に輝いた。手足に障害があり、小学生のころ、入院生活をきっかけに詩を作り始めた。受賞作は「飴」という一編。緑日の夜、五十円玉の穴をのぞき込み、流れ星をつかまえる。その独創的な表現が、審査員から「宮沢賢治を思わせる想像力」と高い評価を受けた。

西尾君は脳性麻痺の障害があり、車いすで生活している。小学 5 年の時に脚の手術で 4 か月の入院生活を送った。

詩は日記のような感覚で、こっそり書き始めた。ある日、病院に勉強を教えに来てくれていた女性教諭が詩に気付いた。西尾君は恥ずかしさのあまり、手で顔を覆ったが「その先生が詩を読んで泣いてくれたんです」。このとき、自分の紡いだ言葉で人を感動させられることを知った。

以来、毎日書きまくった。「説明調になると言葉の力がなくなり、感覚的になりすぎると、人に理解されない。その間でどうバランスを保つか」。詩作の妙味にのめり込んだ。

受賞作の「飴」では、手に取った五十円玉の穴から見える光景や口に入れた飴玉の味から、宇宙へ未来へ、と想像を膨らませた。「どんな子でも飴を舐めれば泣きやむでしょ。あの魔法のような力を言葉で表現したかった」

応募した国民文化祭現代詩フェスティバル（文化

「飴（あめ）」

舌の上で、過ぎた時が流れ始める
緑日の夜祖母がくれた小遣い
半券を買う五十円玉の穴から
僕は夢の中を覗（のぞ）いた
流れ星をつかまえた
僕の手握ったこんべいとう
一つ食べれば 1g の宇宙が宿る
二つ食べれば空も飛べるさ
折り重なる光の層を身に纏（まと）い
どんぐりあめの惑星へ
母がくれた飴玉は
「なんでもひとりでする」の魔法
くじけそうなき口に入れば
甘い魔力が呼び覚ます、僕の中の七色の闘志
涙を流して口に入れても
涙の塩気を海に還すよ
どんな時も飴を舐めれば
タイムマシンが口に広がる
笑顔の僕が彼方に見える

庁など主催）では「斬新で感受性が鋭い。今後が楽しみ」、 「宮沢賢治ばりの想像力」と絶賛され、中高生部門の 714 作の中で最高の栄誉を得た。

全国規模のコンクールへの応募は初めてだった西尾君。「周りの反応ですごいことと分かった」と照れ笑いし、「これから、人の心に染みこんでいくような詩を作りたい」と意気込む。

（神戸新聞・神戸 2011 年 11 月 22 日）